

新しい発想で、将来を見据えた小児科医療を展開

(医)副業の会理事長／外房こどもクリニック院長 黒木 春郎

他人と同じである必要はない

小学校時代の私は、運動が嫌いで、放課後に友達と外を駆け回ることもなく、じっと部屋で過ごすような子どもでした。本を読むのが好きでしたが、私の母親いわく「熱心に読んでいるようで、実は本が逆さまになっていることも多かった」そうです。その後大学在学中と卒業して医局入局後、二度のヒマラヤ遠征登山に参加できたことは、当時を思うと夢のようです。

勉強も、がむしゃらに頑張るタイプではありませんでしたが、小学校時代に通っていた塾の講師が、単に正解を答えさせるだけでなく、しっかりと物事を考えて答えを導くように指導する人でした。その教えによって培った考える力、多面的に物事を捉える習慣は、私の人生における行動や選択に大きく影響したように思います。

その後、中学に入って社会に目が開けてくると、日本はいわゆる激動の時代の真っ只中でした。1970年前後のことです。社会情勢が目まぐるしく変化する中、成績を上げ、良い学校、良い会社に入る人生には魅力を感じませんでした。中学2年生の頃には既に、「組織のルールに従って認められるとか、社会で偉くなることは大切ではない」と考えていましたし、他人と同じである必要はないという、強い信念をもっていました。

ですが、そのような既存の価値観に捉われない生き方をしたいのなら、社会に出るためには何かしらの資格が必要と考えていました。塾の講師の

影響で教職に就くことも考えましたが、両親ともに医師で、医業は親しみのある職業であったことから、最終的には医師の道を選ぶことになりました。

初期診療に対する興味から開業を選択

千葉大学医学部には卒業後文部教官などの経験を積みながら約20年、在籍しました。大学病院として重症患者さんに対応する中、私が常に興味をもったのは、「この患者さんはなぜこういう状態になったのだろうか。プライマリ・ケアを受診した時はどのような症状だったのだろうか？」ということです。そのような思いが常に頭の中にある中、2002年に転機が訪れます。千葉大学で親交のあった内科医から、「いすみ市でプライマリ・ケアを手がける基盤が整ったので、小児科診療を手伝って欲しい」と誘われ、29床の小さな病院をその内科医と共同運営でスタートすることになりました。

その病院で小児のプライマリ・ケアに携わる中、ロールモデルとしたのは、大学病院時代の紹介元の先生方でした。非常に勉強熱心で、ご自身の専門領域に限らず幅広く知識をもっておられ、最初の診断が的確なのです。そうした優秀な先生方の姿を思い出しながら、「そのような医療が提供できているだろうか」と自問自答したものです。そして3年後の2005年、今度は自分自身で小児科クリニックを開業することを決断しました。

開業するならばもっと人口が多く、交通の利便性が高い場所が良いのかもしれませんが、いすみ市